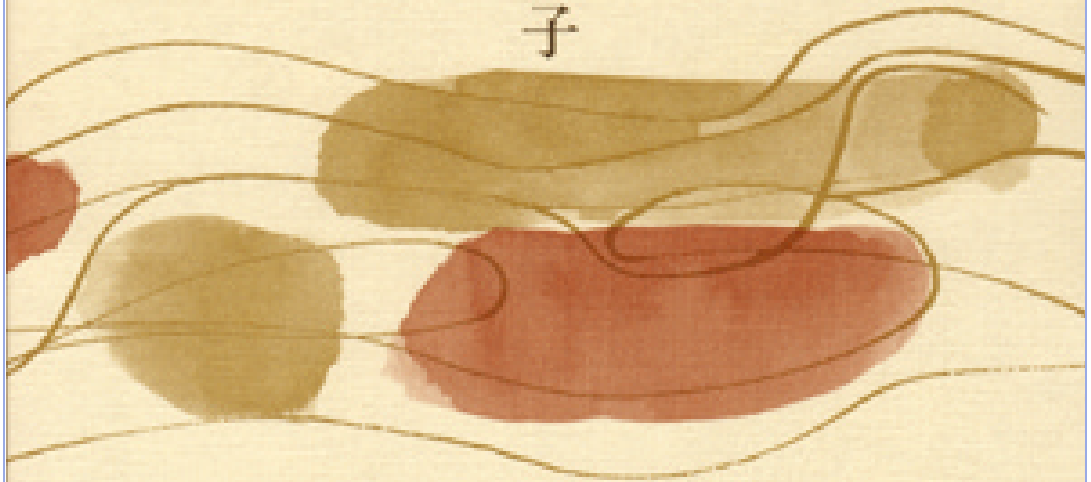


句集

船出

品川鈴子



朝日新聞社

吉祥文

平成六年五月以後

波津女 山口誓子夫人

船 出 せ む 吉 祥 文 の 雪 雲 へ

波^は 津^つ 女^{じょ} 思 ほ ゆ 餅 の 水 替 ふ る 度

膝 掛 け を め くる 磯 風 車 椅子

雛 売 場 細 き 蒸 気 を 隅 に 噴 く

帰 り 待 つ 人 あ ら ね ど も 日 脚 伸 ぶ

卒業の白き指もて写真裂く

浦島の浜を搔き消す牡丹雪

母方の従姉誘はむ探梅行

橋脚の踏まへし島の梅見頃

駅の名に浦・浜・江・あり蜃気楼

山桜魔のさす齡ならねども

紅枝垂手にとり黄泉へことづてす

鯉幟悼みごころに胸を張る

花豌豆定年までの右顧左眄

傘よりの雫に乱る蟻の列

女童と卯の花越しに目で遊ぶ

石を積みふなべり舷ふなべりとき卯波越ゆ

うぶすなの戸毎に咲ける溝菖蒲

天井にゐて誓子蛇波津女蛇

石垣を這ひ出づ蛇に主亡し

世継ぎなき邸の守宮灯を慕ふ

散りぢりの蜘蛛の子一期一会なる

紀伊大^{おお}門^とまで梅雨晴れの誓子墓

加茂茄子独りとり遺されて肥ゆ

加茂茄子の太尻未だ亡びぬ人

加茂茄子の日裏日表寡婦が撫づ

後家付き合ひ糠漬茄子の酸^すさ甘さ

立齧をきりりと巻きて江戸菖蒲

熔接所泰山木に錆兆す

月下美人をんな主の外泊す

朝 歸りして たつぷりと 葉水 撒く

遠 乗りの 助手席に 据ゑ 月下美人

空 蝉の 背に ファスナーは 無かりけり

空 蝉の 屈^く背^せ 文士の 墓 掘む

哲 学の 径 何書ける 落し文

蜻^{やん}蜒^ま 八つ 当り 寺宝の 天井に

百歳 の 小町の 像に 水蜜桃

蝉時雨 泣き虫 なりし 足跡に

親と子の 足指は 似て 浴衣 下駄

風鈴の 売れす ぢ南部 江戸織 部

人工島古地図の女護ヶ島も灼け

涼風の煉瓦小路に占ひ処^ど

「大好き」の落書き灼けて煉瓦塀

からくりに見とれて氷菓とろけたり

汗乳房ふふみ鎮まるぐづり兎よ


指差せば指腐るかや溜^る璃^り蜥^と蚴^か

山伏が缶ビール買ふ特急車

まだ赤き字で初盆の誓子墓

魂迎へ芋殻の梯子ぐらつけり

魂棚に金縁眼鏡聴診器

茄子の馬  ^{ベンツ} 印を彫られたる

霊迎ふ文化教室そそくさ辞し

許されよやゝ煮焦がしの盆霊供

送り火を焚く来迎の茜雲

盆提灯畳めば元の独りぼち

納骨せむ月下美人を匂はせて

紅らめり小町の里の酔芙蓉

広辞苑枕となして三尺寝

うたた寝に亡き髪膚の香籠枕

スペイン語啼きか港の法師蝉

穂芒の駅に車掌も降り立ちぬ

丹後

たれかれの掌還す芒原

お霊供の箸は汚れず菊膾

ひと抱へ丹後の菊を佛苞

対向車待つ露草の碧の群れ

ばつた追ふ子も膝折つて跳ねながら

踏み入らむ蕪村の描きし花野まで

日独俳句大会

蕪村なら筆どう使ふ群れ蜻蛉

ざわめけり蕪村ごのみの竹の春

緋威となりて鞍馬の櫛紅葉

特攻艇出し浜砂に白き茸

日 独 俳 句 大 会

ユーラシアよぎる飛行の星月夜

長き夜をこめて機席に海老寝せり

長き夜の飛行の席に跣坐をなす

時雨坂ゲーテも吾も佇みぬ

法王は右から二番の時雨窓

神像の多き乳房や葡萄熟れ

ユダヤ墓地にてマルメロの屋台売り

羅馬しぐれに縮緬ちりめんの裾さばき

ロ
ー
レ
ライ
崖
に
佇
む
秋
裕

崖
紅葉
ライ
ン
の
人
魚
遠
ま
な
ざ
し

近江今津 丁字屋

片
割
れ
の
吾
へ
と
蓮
実
を
飛
ば
す

生
前
の
足^{そく}
跡^{せき}
ほ
ど
に
深
落
葉

図
書
館
へ
入
ら
む
と
払
ふ
草
風

缶 焚 火 干 満 の な き 湖 汀

冬 霞 波 の 篩^{ふる} ひ し 汀 砂

補 聴 器 に 浮 寝 の 鴨 の ふ ふ み 啼 き

ど の 路 地 も 汀 へ 抜 け て 冬 霞

浮 き 寝 鴨 ど れ が 撃 た れ る ど れ が 去^い め

風口は湖へ横ざま缶焚火

津の泊り人の声こわね音のみやこ鳥

冬凧の湖へ言ふこと言はぬこと

新藁を敷かれて牛の産気づき

齒ならしに牛噛む霜の丸太柵

お抱へ医なりし夫亡し風邪こじれ

夙川カトリック教会

落葉坂不意に不覚の泪ぐせ

花柎はなぼ密語に刺のまじりたる

障子張る生死は紙の裏表

遺のこりたるセータ着れば恋女房

置き忘れ指癖遺る革手袋

聖誕祭司祭袖裏緋なりける

誰も来ぬ山家籠りのクリスマス

NHK 俳壇・TV 出演

寄合家族

平成七年

果せざる約束ひとつ年を越す

初夢の鳥失せものを衡^{くわ}へきし

初庭の要に祖父の据^ゑし岩

縫初めの針のいましめ母譲り

縫初めの針の細さに適^{かな}ふ糸

声にして賀詞を書斎の遺影へと

地震直後「寄合家族」十句

鷹羽氏へ初ファックスを仕^{つかまつ}る

朝日新聞

年迎ふ佛間ありたけ灯を点し

喪籠りに縫ひし春著や雨もよひ

子が舐めて痩せるおたふく戎飴

買初めに縄文の鈴いびつなる

遁^{のが}れきし罹災の手足胼^{ひび}割れて

避難子^しに先づは褌^{どて}袍^らを羽織らせる

襖^{ふすま}もて分かつ寄合家族なり

余震なほ厚着のままに浅眠り

雜居家族眠る地な震いずれ霜瓦

雜居家族ら柚子風呂を譲り合ふ

鋤焼きの鍋奉行なり避難の長

ひとつ鍋つつく避難の四家族

炬燵にて処し方較くらぶ地ない震ば話なし

寒暁の余震を知らず疲れ寝ね

震駭二恐れてふるえあがること

地震あとガラス破片と雪きらめく

罹災地の行幸みゆきを迎へ風花す

震壊しんかいの街を夜回り懐中灯

年の豆地震の裂け目へ転がれり

震しん駭がいの街に追ふべき鬼も居ず

震災の陸の孤島に豆を撒く

冬の凧の航に居眠り避難船

冬の凧の甲板に坐し地な震い通勤

寒月へ出でてさまよふ被災猫

炬燵にも入らず鳴けり被災猫

啓蟄の蟻めく吾ら街壊れ

避難子を迎ふる雛を飾りけり

飾りたる雛に余震ありにけり

風邪薬飲み避難子が深眠り

断層の口を開きし山笑ふ

花綻ぶ避難テントの黝くろずみて

陽炎へり地震なの秒いより長信号

帝国ホテルに探梅の靴の泥

梅林へ姪より叔母の速歩き

粒揃ふ齒ありて古稀の桜鯛

暖房す妹背を契る聖堂に

四月馬鹿天下取りなる手相とて

東吉野「天好園」

雛舐めしあられか少し湿気たる

納め雛差し向ひとす孤老われ

箱閉ぢて納め忘れの雛小物

明あ日した葉は仏隆寺を刻む一子に賭けもして

野に遊ぶ何処かに杖を置き忘れ

師の色紙われの色紙も花の宿

花の宿零時過ぎても灯の点る

鷹指せば高見大おお洞ほら三み峰うね山

根に石を抱き千年の桜咲く

右手山荘

深吉野の花はこの一樹で足れり

千度目の花の盛りの幹を撫づ

鶯となり声そそぐ墓の親

相 続 の 最 た る も の に 山 桜

花 の 雨 亡 き あ と 鈴 を 如 何 に せ む

山 荘 の ひ る ね ソ ナ タ に 誘 いざな は れ

椿園

山 荘 の 糠 雨 に 出 て 芹 を 摘 む

し や く な げ や 武 蔵 の 駆 け し 峠 越 え

未草 〓 未の刻 午後二時に開花

三 県 へ 嵐 靡 きの 鯉 の ぼ り

蛙 鳴 き 継 ぐ 天 辺 の 棚 田 よ り

浜離宮

茶 摘 み 見 ゆ 列 車 弁 当 に 茶 袋 ティーバック

鳥 塚 に 山 時 鳥 ま づ 聞 こ ゆ

未 ひっじぐさ 草 咲 く 頃 下 山 バ ス の 便

熱き飯盛りて反りたる朴若葉

濡れ縁に後姿の青時雨

大阪中之島

佇みて待てり離宮の青時雨

幼な癖いなさ靡きの銀髪に

捨て猫と烏馴れ合ふ木下闇

おもむろに伺候しこう離宮の暮ひきがえる

東吉野

浜離宮水母の紋の伸び縮み

及び腰鼻を触れては薔薇めぐり

万の薔薇匂ふ淀屋の邸あと

植込みに展げ浮浪の更衣

連れ合ひも無くて長居す薔薇の園

滝の水ひとひねりして展ひろがれる

除服二忌が明けて喪服を脱ぐこと

滝音に消さるおつな媪の拍手かしわでは

もののけの闇に絶えざる滝の音

蝮まむし草のつぺらぼうの石佛

杉菜摘むなり癌封じきれざりし

一輪草除服じよぶくし不義理きめこみぬ

迷ひ子に葎がくれの道祖神

誓子旧居紺あぢさゐに迎へられ

地震に裂け梅雨に崩るる誓子邸

地震崩^がれの石垣誓子蛇ひそむ

毀れゆく誓子居に蛇衣を脱ぐ

灯らざる誓子の窓を守宮這ふ

芋の葉の頷きこぼる玉泪

青嵐誓子の涯^はてし苦樂園

誓子句碑(二宮神社)

土筆にも仙台平の袴擦れ

さくらんぼ独りぐらしの鬼喰ひす

人形も唇開けむさくらんぼ

ビニールの威の巢より鳥立ちぬ

除幕碑に七夕神楽たてまつる

涼風にかざしてしやくる神楽鈴

七夕の神楽の笛に移り紅

筑紫舞紗の直垂ひたひれを翻す

今生は亡夫に仕ふ白き薔薇

薔薇園神戸 しあわせの村にとり遺されて目移りす

草笛を習ふ唇荒るるまで

草笛のくちびるに紅使はざる

天上へ草笛「帰れ帰れよ」と

草笛の葉を選ぶ野に佇みて

草笛の音域さぐる葉を銜へ

東京 王子公園

草笛は「帰れソレント」墓前にて

草笛に誘はれ戻る夫ならむ

草笛のときれとぎれに亡き声す

悼 岡本秩様

飛び石は遊びの歩幅下萌ゆる

陰口が伝はる一人静まで

憩へとて大江戸よりの木下闇

論語知らず澁澤邸の落し文

藍あぢさゐ青淵せいえん庵の標とし

稲光り遠き臨いま終わのその刻に

才惜しみ逝くを怒れる雷いかずちか

枕経月下美人にこもりたる

デパートに幽かな暗さ盆提灯

風蘭の白糸もつれ和裁塾

夏休み連れだつ母に丈凌ぐ

枕辺に霊封じ画き夏休み

声替り電車でプール通ひして

出勤す迎へし魂を鍵籠めに

倒れ墓より玉虫の飛びて出づ

誓子廃居芭蕉の蓄宝珠めく

サンダル踏み師が北枕せし畳

分け入りし誓子旧居の草の丈

断層を均らし仮り据ゑ地蔵盆

天の夫どこかに紛れ星月夜

順天堂記念館

木移りの蝉に銀髪かすめらる

仏壇に追ひつめて打つ夜の蜘蛛

甘噛みの仔犬にこぼる芋の露

処女作の皿には月見団子盛る

櫛紅葉華僑の屋根と色競ふ

祝婚 中田様

つくつくし蘭語のカルテ和紙筆字

千葉 昭和の森

蘭方に隆鼻術あり鱗雲

ひぐらしに繰りて元禄腑分けの図

紙魚走る医書の天金革表紙

顕微鏡蘭医の庭に碧揚羽

寄り添ひて栗の宝珠が毬に充つ

動くとも無くずれぬたる穴まどひ

尾先糸めく四尺の穴まどひ

穴まどひ錦文様ずらしては

穴まどひ巳年の亡き名呼びかけむ

岩陰に尾を余したる穴まどひ

埼玉県比企郡小川町

巻く岩といづれ冷たき穴まどひ

穴まどひ筋金入りの紐もたげ

穴まどひ吾を釘付けの小半時

東吉野

穴まどひ応じてならぬ誘ひあり

穴まどひせせらぎ舐める糸の舌

毛皮襟巻武蔵野の森へ入る

凧を梳く震災の齒抜けビル

老壯の境に揺らぐ壁炉の火

狼の滅びし谿に紅葉狩

玉砂利の打撲傷が匂ふ榎元句は漢字リンなり

綸子袖榎リンひとつをひそめたる

枳
榎
梨
拾
ひ
噛
み
し
む
菟^う
田^た
野^の
人

菊
を
焚
く
木
花
咲
耶
姫
の
庭

歌
垣
の
跡
な
り
黄
葉
敷
き
つ
め
て

閑
を
得
て
誓
子
展
へ
と
京
し
ぐ
れ

核
ま
た
も
爆
ぜ
し
秋
潮
水
族
館

中背の夫を花野に見失ふ

里の子と目顔を交す花野径

七五三鈴の袂ひの三五調

柿^{かき}衛^{もり}館たわわの柿に突っ支ひ棒

生みの業なさざる白髪降誕祭

聖誕祭子を欲りしまゝ共白髪

検札の車掌つぶやく聖夜かと

一遍とふるさと同じ枯野行

菊に香燻くもてなしの鄙泊り

睡り児の手びくりと冬日向

雪見むと読書眼鏡をしまひたり

雪の関越えて帝国ホテルの宴

足跡はイエスか独り雪籠り

池の鴛鴦奇数なること怪しめり

番ひ鴛鴦群に背きて憚らず

繋ぐ紐あるかに泳ぐ番ひ鴛鴦

水草を啄むときも番ひ鴛鴦

京しぐれ帽を目深にすれば足る

明王の力瘤にも紅葉照り

悴みて真似る大日如来の印

オルゴールはメリーウイドー照紅葉

鴟 猛る姿は見せず杉襖

鈴 求め終大師をへ巡れり

ぼろ市に買喰ひ立喰ひ憚らず

著者略歴

品川鈴子（しながわ・すずこ）

昭和7年（1932）愛媛県生まれ

俳句は山口誓子門、連句は橋間石門

平成6年（1994）5月「ぐろっけ」創刊・主宰 現在に至る

日本文芸家協会会員 俳人協会幹事

国際俳句協会会員

連句協会理事「ひよどり連句会」主宰

現住所＝〒651-1123

神戸市北区ひよどり台1-17-1

電話＝078-741-4472

FAX＝同上

2001年4月15日 第一刷発行

句集 船 出

著者＝品川鈴子

発行者＝大上朝美

発行所＝朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

電話03（3545）0131（代表）

編集＝ウエップ編集室

俳句朝日編集部

販売＝出版販売部

振替＝00190・0155414

印刷＝株式会社東京印書館

※定価はケースに表示してあります

ISBN4-02-330659-2